

なが せ かい
永 瀬 開

学位の種類 博士（教育学）

学記番号 教博 第 177 号

学位授与年月日 平成 28 年 3 月 25 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条 1 項該当

研究科・専攻 東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程）
総合教育科学専攻

学位論文題目 自閉症スペクトラム障害者におけるユーモア体験に関する研究

論文審査委員 (主査)
教授 川住 隆一 教授 野口 和人
准教授 川崎 聡大

〈論文内容の要旨〉

本論文では、社会的コミュニケーションの障害及び、限局的・反復的行動パターンを特徴とする自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder：以下、ASD）者におけるユーモア体験の特徴について検討することを目的とした。ユーモア体験とは、刺激を認知することによって生起する一過性の愉悦の情動体験であると定義される（野村・丸野，2008）。ユーモア体験は、他者との関係を良好にする機能を有した情動であること（Fralely & Aron, 2004）が知られているが、これまで ASD 者のユーモア体験について扱った研究では、典型発達（Typically Developing：以下 TD）者と ASD 者とは、ユーモア体験が喚起される際の認知処理過程が異なること（Reddy et al., 2002）、ユーモア体験が喚起される際の認知処理過程の異なりが、ASD 者の社会的コミュニケーションの障害の背景にあること（Rosqvist, 2012）が指摘されている。そのため、ASD 者のユーモア体験の特徴を明らかにすることは、学術的、臨床的にも意義のあると考えられる。しかしながら、ASD 者におけるユーモア体験が喚起される際の認知処理過程の異なりが、どのような要因から生じるかについては十分に

明らかにされてはいない。そこで、本論文では以下の構成で ASD 者のユーモア体験が喚起される際の認知処理過程の特徴を明らかにすることとした。

まず第Ⅰ部では「本研究における問題の所在と目的」として、ASD 者のユーモア体験の特徴を検討する上での問題の所在と目的について、第 1 章、第 2 章、及び第 3 章から述べる。具体的には、第 1 章において、ASD がどのような障害特徴を有するのかについてまとめた後、ASD 者のユーモア体験が彼・彼女らの状態像にどのように関連し、位置づくのかについて述べた。そして、第 2 章においては、ユーモア体験が喚起する認知処理過程に焦点を当て、ASD 者のユーモア体験を扱った先行研究を認知処理過程の各認知処理、すなわち「構造的不適合の評価」「分かりやすさの認知」「刺激の精緻化」「意味性の評価」に基づいて整理した。その後、ASD 者における各認知処理の検討課題について述べた。第 3 章では、第 2 章で明らかにした検討課題に基づいて、本研究の目的を述べた。

次に第Ⅱ部では「自閉症スペクトラム障害者におけるユーモア体験に関する特徴の検討」として、第Ⅰ部で指摘された課題点の検証を第 4 章、第 5 章、第 6 章、及び第 7 章において行った。

第 4 章では、ユーモア体験が喚起される際の一次的処理である「構造的不適合の評価」に注目した。「構造的不適合の評価」とは、ユーモア刺激を構成する要素の組み合わせやパターンと、一般的知識や常識との乖離(構造的不適合)の理解であると定義される(伊藤, 2010)。本章では、ASD 者は TD 者に比べて、ユーモア刺激の因果関係を理解することが必要な「概念レベル」の構造的不適合の評価が困難である傾向にあること、ASD 者において、「概念レベル」とユーモア刺激の因果関係の理解が不要な「スキーマレベル」の構造的不適合との間でユーモア体験の強さに違いが見られないことが明らかになった。

第 5 章では、ユーモア体験の強度を増幅させる二次的処理である「分かりやすさの認知」と「刺激の精緻化」に注目した。「分かりやすさの認知」とは、ユーモア刺激における構造的不適合が生じた原因を推測することであると定義され(伊藤, 2010)、「刺激の精緻化」とは、ユーモア刺激となる状況のその後の展開やユーモア刺激となる状況に登場する人物の心情など、ユーモア刺激に関連した様々な連想を行うことだと定義される(野村・丸野, 2008)。本章では、ASD 者において、構造的不適合の原因を示した手がかり情報が「分かりやすさの認知」や「刺激の精緻化」に影響を与えないこと、ASD 者において「刺激の精緻化」のみがユーモア体験の強さに影響を与えること、ASD 者は「刺激の精緻化」において、ユーモア刺激の今後の展開や、ユーモア刺激における事物の特徴に関する連想を行うこと、という特徴を明らかにした。

第 6 章と第 7 章においては、ユーモア体験を低減する「意味性の評価」に注目した。「意味性の評価」とは、ユーモア体験をする個人にとって、ユーモア刺激が重要な意味、価値を持つかどうかに関する理解であると定義される(伊藤, 2011)。これらの章では、ASD 者において意味性が弱く評価されるほど、ユーモア体験が低減されること、ASD 者と TD 者とは、「意味性の評価」を行う際の理由が異なること、が明らかとなった。

最後に第Ⅲ部「本研究の総括」では、第Ⅱ部で明らかになった結果をふまえ、ASD 者のユーモア体験に関する特徴について総括を行った。具体的には第 8 章において、第Ⅱ部で明ら

かにした ASD 者のユーモア体験の認知処理過程の特徴をまとめたうえで、その特徴が ASD 者におけるユーモア体験の共有や社会的コミュニケーションにどのように影響を与えるかについて述べた。そして、ASD 者におけるユーモア体験の共有に関する臨床的支援の方向性についても第Ⅱ部で明らかにした知見に基づいて述べた。

最後に第 9 章では、本論文の意義を改めて述べた。そして、本論文の今後の課題と、ASD 者のユーモア体験に関する今後の研究の展望についても述べた。

〈 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 〉

アメリカ精神医学会による精神疾患の診断・統計マニュアル (DSM-5) では、自閉症スペクトラム障害の基本的特徴として「持続する相互的な社会的コミュニケーションや対人的相互反応の障害」があることを指摘するとともに、その一つの例として「興味、情動、または感情を共有することの少なさ」を取り上げている。本研究は、ここでいう興味や情動、感情の共有に関する問題を一連の心理学的実験を通して検討したものである。

自閉症スペクトラム障害者のコミュニケーション障害に関しては、これまでに国内外で様々な観点から多数の研究が行われているが、ユーモア体験という観点からの研究は、国内的には極めて少数である。そこで本研究においては、自閉症スペクトラム障害者のユーモア体験に関する海外の先行研究の詳細な分析を行っている。その結果、典型発達者と自閉症スペクトラム障害者とはユーモア体験が喚起される際の認知処理過程が異なり、このことが後者の社会的コミュニケーション障害の背景にあることが仮定されていること、したがってこの観点からの研究を行う意義は極めて大きいことを見出している。一方、そのような差異をもたらす要因についてはこれまで明らかにされていないことを指摘している。これらの指摘は、今後の国内外の研究を喚起する端緒として評価できるであろう。

本研究では、ユーモア体験を喚起させる認知処理過程を一次的処理（「構造的不適合の評価」）、二次的処理（「分かりやすさの認知」と「刺激の精緻化」）および三次的処理（「意味性の評価」）に整理した上で、典型発達者との比較研究により自閉症スペクトラム障害者の認知処理過程について多くの特徴を見出すことに成功している。具体的には、構造的不適合の評価に関連する特徴として 2 点、分かりやすさの認知と刺激の精緻化に関連して 4 点、意味性の評価に関連する特徴として 4 点であり、このように多くの特徴を見出したことの学術的意義は極めて大きいと評価できる。これらの知見は、ユーモア体験の研究に限らず、他の側面での「情動の共有」問題を解明し、社会的コミュニケーションや対人的相互反応を促進する支援につながることを期待される。

一方、本研究では自閉症スペクトラム障害者、典型発達者ともに青年期にある人を主たる対象としている。このため、自閉症スペクトラム障害者は、いつ頃を始まりとしてどのような経過を経て他者の言動や事象から「ユーモア」を感じ取るようになるのかという発達の観点からの検討は未着手である。また、ユーモア体験の蓄積が他者との関係性やコミュニケー

ションにどのような影響、あるいは肯定的変化をもたらすのかという点の検討を行うことが求められる。さらに今回、実験研究の成果に基づいて提案された臨床的支援の具体的方法もその有効性を確認していくことが必要である。このように残された課題はあるものの、本研究の斯学に対する貢献はきわめて大である。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。